

若い人たちの意志

宮本百合子

青空文庫

ゆたかに、より能力のある人生を、ということころもちから、このごろの十代の人たちはどう生きているか、そして、どう生きようと欲しているか、という問題について注目されはじめている。

これは日本にとつて、どういう角度からも決して無意義なことではない。若い女性とうとき、これまでその若さは何となし結婚適齢期のぐるりで考えられていた。昔の人達が年ごろの若い方とよぶとき、それは女学校卒業ごろから結婚までぐらいの間の女性たちをさした。女性には年ごろという一つのよびかたがあつても、男の年ごろという考え方には昔からなかつた。このことは、日本の社会の習慣のなかで、女性の一生とその運命とが、妻となる、という形に決定したものとして扱われて来た証拠であつた。

十代の人たちが、社会の歴史にとつて、注目すべき年代として登場して來たことは、日本的一般が、人間というものについて、いくらか複雑で立体的な理解をもちはじめたことを語つている。ほんとにどんな大人でも、しづかに自分たちが生きて來た道をかえりみれば、十二、三から十五、六、七歳ごろの月日が、どんなに感銘にみちたものであつたか、考えずにはいられないだろう。大人は自分たちの十代をかえりみたとき、とかく、わたし

がそのくらいの年ごろだった頃には、と、少年少女としての自分がおかれていた境遇と、それにつれて現在では物語めいて変化しているその時代の様相を想い起す場合が多いらしい。

そして多くの場合、そういう境遇とか、世相とかにおいて、いまの少年少女、わかい人々の生きかたと、かつてあつた生きかたとを比較したがる。——しかもおとなとしてのきょうの心で——

だけれども、そういう方法は、大人の方法で、しかもふるい大人、若いものと自分たちという区別の意識からぬけられないタイプのおとの方法だと思う。

多くの可能のひそめられている人間誕生として、赤坊を見るところをもつているおとな。小さい人間の成長過程として男の子供、女の子供の生きかたを見まもるような表情をもつているおとな。

そして、心からごく若い男——少年、ごく若い婦人たち——少女を、人間的自覚のあかつきの面を向けている大切な美しい時期の人たちとして理解をもつているおとなたち。そういうおとの人間が日本の中に一人でも多く形成されてゆくことを、きょうのおとな自身がどれほど希つていることだろう。

ある意味で、いまのおとなにあきたりない苦しさとたたかつていてる若い人たちの悩みの本質は、そつくりそのまま、そう狭くない範囲でおとな自身のたたかつていてるなやみでもあるというのが、いまの現実のありようである。人間としての悩みは、成長のそれぞれの時期にちがつた形をとつてあらわれる。

けれども、そのさまざまな形を通じて、一貫した「人間の問題」として、わかい人々の生活は、年齢をこして、人間らしくあろうと欲しているすべての年代の人々に通じているのである。

十代の若いひとが、人生にめざめそめて、朝霧がいつかはれてゆくように自分の育つて来た環境を自覚しはじめたとき。人間としての自我が覚醒しはじめて、自分を育て来ていまも周囲をとりかこんでいる社会と家庭のしきたりに、これまで思いもしなかつたはげしい批判の感情がわき立つようになつたとき。そういう自分におどろかない少年少女はひとりだつてなかつたろうと思う。十代の人たちの肉体と精神とにうまれる秘密、不安、はげしい人生への欲望が燃えるのに、その内容が自分にもまだはつきりつかめないという、あてどない寂しさとあこがれ。十代は初々しく苦しい人間のめざめである。

ロダンの「青銅時代」^{ブロンズ・エイジ}が表現しているように。

肉体が性にめざめるとき、時期をひとしくして人間の精神に自我が覚醒し、開花して来るというヒューマニティーの過程にこそ、思えば感動をおさえがたい人間の光栄がある。美しい十代は、小さい男性、小さい婦人たちとして、性が開花に向いつつ、それが蓄であるゆえの、まだどこか中性の清冽さを湛えていて、おとなのように生物的な負担の重さ（多くの家庭は、巣のようだから）によたよたしない精神が、萌え出たばかりの新鮮な自我を核心に、長足に子供からおとなへ、家庭から社会へと、拡大した現実にふれてゆくのである。

十一、二歳になると、何となし子供の心に生じるおとなたよりなさと不安心。やがて、年とともにおとな的生活——両親たち、学校の先生たちに向けられる鋭くてむき出しの批判。それらの批判は、若いひとたちにめざめてゆく、理性の成長の幅に応じてまだ、狭い、しかし、同時にまじりけなくて、日々の営みの大変さにおされがちなため、いつの間にか惰性で生きているおとなにとつて、虚をつかれたというショックに似た感情を与える。おとなが、若い人たちと、まじめに話してくれようとしないという不満。

それは、おとながわれしらず示す人間的卑屈さである。両親の夫婦喧嘩が、子供の人生

をどんなにいためつけるかということを考えないで、同じことをしばしばくりかえしてい
る理解しがたいおとの不条理。おとなはおとの秘密をもつていて。それにふれられそ
うになつたとき、なまいきとか強情とかよぶ。だがそのことは、全身で若いひとが示す人
間生活というものへのありかたについてのきびしい質問である場合が少くない。

十代の理性は、おとなが、日常の必要によつていつか鈍らされ、角をまるくさせられて
いる分別と同じものではない。社会生活の上に固定しているさまざまの約束に、若いひと
たちの心と体とがぶつかって、輝くような希望とともに自分について感じはじめたぼんや
りしたいとわしさの間にゆれながら、いくらか不器用に生きかたの追求に出発する。

十代の条理は、人生のいつの季節よりも単純で明白である。ところが、他の半面で、十
代の爆発的な情熱は、同じそのひとを、最も非条理に行動させるメントをも持つていて。
あるとき家出を思わない若いひとたちがあるだろうか。おとの世界を憎悪し、そのよ
うに不協和な自分の存在を憎み悲しまなかつた若いひとびとがあるだろうか。十代の人間
悲劇は、社会関係に対して稚く、しかも全く激烈であるということに特色をもつていて。
文学が青春の周辺にあつて、そこからはなれない理由の深さがここにある。

青春は人類の可能性の時期であり、どんなに肉体の年齢が重なるうと、その重みでかが

みこんでしまわない人間精神の若さこそ、人類の不滅の可能につながっているのであるから、この社会で人間がもつてている社会関係、人間の生きかたに密着している文学が、若いひととともににあるのは自然なことである。

そして、そういう文学は、いつも、若さというものを、人間の可能性が現実とたたかってゆく過程としての人生を発見している。すすみゆく歴史のあかしとして見る。青春は単に題材となるだけのものではない。

十六歳ぐらいになつてゐるきょうの女の子が、ひとりの人間として、どの位確立しているか、少くとも自分の力で人間として確立しようと努力しているかという事実を、きょうのおとなは、それが必要なほど十分知つていないのでなかろうか。

母親の育つた時代、いわゆる女学校教育はあつたけれども、それはきまつた内容だつたし、人間交渉の課題として、いまあらわれている男女共学もなかつた。

姉の時代は学徒動員で、そこには青春の破壊とそれによつて不具にされた若さがある。

いま十六になつたわかい人たちのなかで、少し考えるひとは、その二つの姿に、自分たちはどう生きようとしているか、という課題を対決させずにはいられない状況に生きていく

る。そこに、深い不安がある。はやく自分の力で生きるようになりたい。こんなにもそうして生きることが正しく、自然だと思えるのに、十六歳の人生は、まだ封鎖されている。自分として経済能力もまだない。もしあるとすればそれは年少な人たちの労働力をしぼる仕くみである。

十代のひとの発言が、社会的な意味をもつものとして登場しはじめたことは、人間のゆたかさにとつてよろこばしいことだけれども、それについて、十代のひと自身ある程度辛辣な感情を経験していることを、おとなは知つていてるだろう。

スタイル・ブツクが、「ジュニア」の間に販路をひろめるために、若い夢をかきたてている。

十代が、ジャーナリズムの新しい開拓地と見られているのではないかということを、わかい女性は案外批判しはじめている。

いわゆる少女向の雑誌や、少女歌劇につながる趣味——少女趣味一般は、若いひとたち自身にわたしたちはちがうと思われている要素を少なからずもつていてる。

なぜなら、十代のひとびとがしんに求めてているのは、人間として、女としてどう生きてゆくかということについての率直な検討であつて、「十代の事件」ではないのだから。若

い人たちの現実のゆたかさ、人間らしさであつて、おとなが、若い人によつて、描き出す夢やロマンティシズムばかりではない。このことは、先頃、ある婦人雑誌が催した、十代のひとたちの座談会に関連して学校当局とその少女、その親との間におこつた事件について、同じ年ごろの若いひとたちが批判した、いくつかの短い文章にも、あらわれていた。

その座談会で一人の少女が、学校のつまらなさ、について、軽蔑をふくんで発言をしたこと、学校当局は、教育そのものを否定している生徒はおけない、と云つて処分した。その処分をめぐるいきさつに、その少女の親であるひとの、すこし普通の暮しの人たちとちがう態度も作用しているようだ。そのように、一人の少女の発言をめぐつていきりたつおとなたちにかかわらず、その座談会について批評をよせている年わかいひとたちの判断は、平静であり、考るべき点をとらえて考へている。学校がつまらないということ——旺盛な知識欲をみたすほんとの勉強が学校にはかけているということについて、こんにちの若いひとの苦痛は、共通である。それは無理もない。学校教育というものが与える最もよいことは、そのひとが一生自分で勉強をつづけてゆけるために必要な勉学というものの「方法」を身につけさせるという点になければならないのに、きょうでは先生たちさえも、まだそこに重点をおいていいのだという自信をもつていはない。

だけれども、ただの学校否定に意味ないことを、わかいひとびとの批判は、とりあげてある。アナトール・フランスが諷刺したように、「行儀よく並んでつぎこまひとたちの大部分は、ジャーナリズムの場面に出席して語っているひとたちよりも、もつと日本のきようの一般的な現実に即して生活しているし、自主的な未来の生活設計に腐心している」という事実をあげて、率直に自然にかかれていた。

十代のひとびとの人生に、アルバイトがはいつて来ている。それは不思議でないことになった。おとめは、夢のうちに生きず、現実に、人間の女性としての可能をためそうとしつつある。その態度にこそ、新鮮な十代のほこりと美とがある。おとな対十代のひとという古い関係で見ることはなくならなければならない。あなたも、そしてわたしたちも、ひろい人間としての関係の中に十代は自身を示していいのだと思う。

十代のひとが醜いと感じることは、おとなの世界でも多くの場合醜いことである。それが人間としての醜さとして社会生活の判断に適用するような社会、十代のひとたちが、よりよく生きようと熱望する、その熱望が、すべての人々の熱望に通じて行為されるような社会にしてゆくこと。自分自身を偽われず、新しい世代の何ものかであろうと欲する十代

の美德をわたしたちは、生涯のいつのときにも失つてはならないと思う。

〔一九五一年一月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十五卷」新日本出版社

1980（昭和55）年5月20日初版発行
1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十二卷」河出書房

1952（昭和27）年1月発行

初出：「新女苑」

1951（昭和26）年1月号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003年6月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

若い人たちの意志

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>